

青年期における直接的・代理的場面での「泣き」の経験
—男女差および共感性，ストレス・コーピングとの関連に焦点を当てて—

澤田 忠幸*，橋本 巖**，松尾 浩一郎***

Emotional Crying in Adolescence :
Gender Differences and the Relationship between Crying, Empathy and Stress Coping

Tadayuki SAWADA* , Iwao HASHIMOTO** , Koichiro MATSUO***

Abstract

In this research, we investigated situational factors which influence gender differences in adolescents' emotional crying. In study 1, two hundred forty nine undergraduate students completed questionnaires on crying experience in adolescence, which consist of Scale A on crying over one's own emotional events, and Scale B on vicarious crying over others' emotional events. Participants rated each item in terms of experience of arousing emotion, and then suppressing or allowing tears to flow. In study 2, other 206 undergraduate students completed the Scale A and the Scale B which had been used in study 1 in addition to the multidimensional empathy scale and the stress coping scale.

The results indicated both Scale A and Scale B showed three situational factors. On the half of the situations, men did not differ from women in whether they experienced some arousal of emotion or not. And women also showed efforts to suppress crying, while women reported more expressed crying than men. Crying showed positive correlation with active stress coping, especially in women, and also with perspective-taking and the personal distress in empathy.

These results suggest the role of situational factors moderating gender differences in perceived significance of regulation of emotional crying.

Key words : emotional crying, situational factor, empathy, stress coping, gender difference

序 文

高等学校や大学の時期は青年後期にあたり，アイデンティティの模索を通じて，将来の進路決定や社会人として独立していく準備の時期と言える。その一方で，青年期特有の不安定さも抱えており，精神疾患をはじめとして，摂食障害，神経症など，さまざまな心理的問題の発生しやすい時期である。例えば，大学生の学生相談でも，進路や修学，対人関係，恋愛関係に関する相談内容が多くを占めることが報告されている¹⁾。このようなアイデンティティの模索や対人関係の中で，青年期には喜怒哀楽さまざまな感情を経験する。しかし，青年期を対象とした情動体験は，臨床的アプローチやストレス研究で取り上げられることはあっても極めて少ない。また，情動制御に関する発達の研究でも，加齢とともに状況に応じた感情の表出と制御をすることが望ましいとする暗黙の仮

定に基づくため²⁾，“泣くこと”や情動の経験に焦点をあてた研究は，意図的演出としての泣き（ex. 涙を武器にする）といった特定の文脈で扱われることはあるが，洋の東西を問わず研究自体極めて少ないと言える^{3) 4)}。

しかしながら，青年期や成人期における泣き（crying）は，内的感情の表出であると同時に，泣くことに伴う動揺や落涙を抑制しきれず自己が動かされ，結果的に個人の内的状態や周囲の他者に影響する情動経験と言える⁴⁾。したがって，青年期における“泣くこと”の意味を考える場合，単にそれを情動制御の失敗や未熟な社会性を示すものにとらえるのではなく，泣くことを制御・抑制しようとする意識の中で感情の高まりを経験する，あるいは，自分自身が泣きそうになっていることを意識しながら，なんとか泣くことを抑制しようとしている主観的な葛藤経験の結果としてとらえることが重要である^{3) 5)}。すなわち，泣くという行動を“生理—内的情動経験—行動

*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科 **愛媛大学教育学部 ***聖カタリナ大学社会福祉学部

*Ehime Prefectural University of Health Sciences, Faculty of Health Sciences, Department of Nursing. **Ehime University, Faculty of Education.

***St. Catherine University, Faculty of Social Welfare.

と表出 (weeping, tears-shedding, crying)”という一連のシステムの活性化に基づくと考えるものである。このような観点から青年期における“泣き”をとらえ直すと、泣くことは自己の弱さを露呈するなど、否定的意味のみを有するのではなく、自己と向き合い精神的成長につながる積極的側面を有すると考えられる。

また、これまで泣きに関する研究の多くが男女差に注目してきた。そして、男性に比べ女性の方が泣くことが多いことが繰り返し指摘されている^{4) 5) 6)}。しかし、ある状況における泣きやすさ (crying proneness) や実際に泣いた頻度 (crying frequency)^{4) 5)}だけでなく、“泣くことの意味”に焦点をあてて男女差について検討した研究は少ない。例えば、自己の直接経験による泣きと他者に起こった出来事による代理的な泣きでは、男女によって、泣くことや泣きの抑制に対する価値観が異なることが予想される。

本研究では、以上のような問題意識に基づき、高校入学以降大学生に至る間の“泣くこと”に関する質問紙調査を通じて、青年が泣きそうになったり、実際に泣いたりするのはどのような状況においてであるのかについて検討することを目的とする。具体的には、第1に自己に起こった出来事による直接的泣きおよび他者に起こった出来事による代理的泣きの経験における状況因子を測定できる尺度を作成し、その妥当性と信頼性について検証する。第2に、自己の直接経験あるいは他者に起こった出来事の代理的経験による泣きの経験と共感性、ストレスを処理しようとして意識的に行われる認知的努力としてのストレス・コーピング (stress coping) 傾向との関連性について、男女による違いが認められるか否かに注目して検討する。

なお、本研究は“青年期における感情経験と泣くことの関係”に関する研究プロジェクトの一部である。このプロジェクトでは、本研究で報告する内容以外に、つらい出来事による印象的な泣きの経験についての自由記述、泣いている際の感情経験、泣きの対人表出状況、泣いた経験による心理的变化などに関する質問項目からなる質問紙調査を実施した。本研究では、このうち青年期の直接的あるいは代理的な泣き経験における情動制御、共感性、ストレス・コーピングに関する成果について報告する。

調 査 1

目 的

自己に起こった直接的経験および他者に起こった出来事の代理的経験による泣きの経験尺度を作成する。

調査対象

地方A国立大学の複数の学部学生を対象に調査用紙を

配布した。その結果、339名 (男性133名、女性206名) から回答が得られた。このうち、全ての項目に回答していた249名 (男性90名、女性159名) を分析対象とした (有効回答率73.5%)。

調査内容と手続き

自記式質問紙調査で、以下の内容からなる。実施にあたっては、無記名式で守秘義務を徹底した。その際、泣くという極めて個人的な内容であるため、調査対象者自身が答えることができる内容のみを記述してもらうことなどを事前に教示した。

泣きの経験

高等学校入学以降、現在に至るまでの泣きの経験について測定する質問紙を作成した。これは、Williams & Morris⁷⁾およびVingerhoets, et al⁴⁾を参考にして、一般に青年期の男女が泣くことを経験するであろうと想定される出来事を記述したものである。本プロジェクトでは、自身が経験した出来事と他者に起こった出来事を代理的に経験した際の、その人の泣きに対する反応を分離して検討する目的から、以下に示す2種類の質問紙を作成した。

(1) 自身に起こった直接経験によって泣いた経験

24項目作成した。各項目のような出来事を経験したことがあるか、また経験したことがあるならば、そのときに感情がこみあげて泣いたことがあるか、ということ思い出してもらい評定を求めた。

(2) 他者に起こった出来事による代理的経験によって泣いた経験

12項目作成した。自分ではない他者の身に起きた悲しいことやうれしいことに接した経験が自分にあったか、また経験したことがあるならば、そのときに感情がこみあげてきて泣いたことがあるか、ということ想起して評定するよう求めた。

回答は各項目について、“経験したことがない”“感情がこみあげてきたが、大抵泣くほどではなかった”“感情がこみあげてきたが、大抵泣くことをこらえた”“感情がこみあげてきて泣くことが多かった”の4段階で評定を求めた^{脚1)}。

結 果 と 考 察

249名を対象に、自身に起こった直接経験によって泣いた経験 (“直接経験による泣き”と略す) 場面24項目および他者に起こった出来事による代理的経験によって泣いた経験 (“代理的経験による泣き”と略す) 場面12項目それぞれについて、“経験したことがない”を1点、“感情がこみあげてきたが、大抵泣くほどではなかった”を2点、“感情がこみあげてきたが、大抵泣くことをこらえた”を3点、“感情がこみあげてきて泣くことが多かった”を4点として得点化して主成分分析 (プロマックス回転)

を行った。

自身に起こった直接経験によって泣いた経験

3因子に集約することができた。第1因子では、“みんなで応援していたチームが勝利した”“みんなで応援していたチームが負けてしまった”“自分が一生懸命練習して臨んだ試合で勝利したり、大会などでよい成績を残すことができた”など8項目で因子負荷量が高かった。そこで、“自己努力や仲間との共同経験を経た達成・敗北と絆の実感”と解釈、命名した（以下“達成・敗北”と略す）。第2因子では、“信じていた人に裏切られた”“他者から傷つけられたり、いじめられた”“大切な人（家族や友人など）が亡くなった”など8項目で因子負荷量が高かった。そこで、“愛着・信頼関係における危機的な‘揺らぎ’”と解釈、命名した（“愛着危機”と略す）。第3因子では、“自分の将来のことを考え、どうしたらいいのか、と途方にくれてしまった”“勉強や技術の習得などが自分の思うように進まなかった”“さびしくてしかたがないと強く感じた”の3項目で因子負荷量が高かった。そこで、“自己の能力や将来への確信のなさや不安、孤独感”と解釈、命名した（“確信のなさ”と略す）。

3因子斜交モデルについて Amos5.0を用いて確認的因子分析を行ったところ、モデルとデータとの各種適合値は、CMIN/DF=2.889, GFI=.853, AGFI=.812, CFI=.648, RMSEA=.087であった。

他者に起こった出来事による代理的経験によって泣いた経験

3因子に集約することができた。第1因子では、“大切な人（家族や友人など）がとても喜んでる様子を目の当たりにしたり、本人からその話を聞いたりした”“知人がとても喜んでる姿を目の当たりにしたり、本人からその話を聞いたりした”など4項目で因子負荷量が高かった。そこで、“身近な実在の他者に生じた肯定的な感情の代理的経験による泣き”と命名した（以下“身近な他者の肯定的感情”と略す）。第2因子では、“大切な人（家族や友人など）がとても悲しい思いをしているという知らせが届いたり、人づてにそのことを聞いたりした”“知人がとても悲しい思いをしているという知らせが届いたり、人づてにそのことを聞いたりした”など4項目で因子負荷量が高く、“身近な実在の他者に生じた否定的な感情の代理的経験による泣き”と命名した（“身近な他者の否定的感情”と略す）。第3因子では、“ドキュメンタリー番組やニュース番組で他者がとてもつらそうにしている姿を見た”“映画や本などで物語の登場人物がとてもすばらしいことをやり遂げた姿を見た”など4項目で因子負荷量が高く、“メディア・物語の登場人物における感情の代理的経験による泣き”と命名した（“メディア・物語の他者の感情”と略す）。確認的因子分析を行ったところ、CMIN/DF=2.384, GFI=.924, AGFI=.883, CFI=.916,

RMSEA=.075と、モデルとデータとの適合度は比較的高かった。

調査 2

目的

調査1で作成した“直接経験による泣き”および“代理的経験による泣き”尺度を、別サンプルを対象として実施し、尺度の妥当性と信頼性について検証する。その上で、感情の高まりや泣きの体験の程度、あるいは、直接経験による泣き、代理的経験による泣きと共感性およびストレス・コーピングとの関連性について、男女による違いの有無に注目して検討する^{5) 6)}。

調査対象

調査1では一般大学の学生を対象としたので、調査2では医療福祉系の大学・短期大学に通う男女学生を中心に調査用紙を配布した。あわせて総合大学の男女学生にも配布した。その結果、353名から回答が得られた。このうち、尺度ごとに欠損値が1つ以内であった206名（男性63名、女性142名、性別無記入1名）を分析対象とした（有効回答率58.4%）。有効回答者の90.8%は医療福祉系学部の学生であった。なお、本研究では取りあげていないが、実際の調査では続く質問内容で直接経験による泣きの尺度項目または類似するエピソードの中から、つらい出来事による泣きの経験場面を一つ想起してもらっており、そのエピソードの記述や回想される体験についての質問に回答が得られた者のみを分析対象としている。したがって、調査2の分析対象者206名は、うれしさや喜びの感動体験ではなく、実際に質問項目に挙げられている出来事と類似したつらい体験の中で、泣いた経験を有する青年期の男女と言える。

調査内容と手続き

自記式質問紙調査で以下の内容からなる。また、調査1と同様に守秘義務や倫理的配慮について教示を行うとともに明記した。

1. 泣きの経験

調査1と同じ。

2. 共感性

橋本・角田⁸⁾の共感性尺度を用いた。この質問紙は、Davis⁹⁾や登張¹⁰⁾と同様に、“想像的感情移入”“視点取得”“個人的苦痛”“共感的関心”の4因子構造が想定されており、共感性の情動的な側面（“個人的苦痛”“共感的関心”）だけでなく、認知的な側面（“想像的感情移入”“視点取得”）を含む多面的共感性尺度である。本研究では、原尺度37項目から回答者の負担軽減を目的として、因子負荷量を基準に25項目を採用した。項目ごとに自分自身にどの程度当てはまるかについて、“まったくあてはまらない(1)”から“非常によくあてはまる(7)”の7段階で評定を求めた。

3. ストレス・コーピング

尾関¹¹⁾の14項目からなるコーピング尺度を用いた。この尺度は大学生向けに開発され、各自の現在のストレスサーに対する対応の仕方について評定を求めるものである。尾関¹¹⁾は、情報収集や再検討などの問題解決に直接関与する“問題焦点型対処”と、ストレスサーにより引き起こされる情動反応に焦点を当てて注意を切り替えたり、気持ちを調節する“情緒焦点型対処”を区別せず、両者を含めて“積極的対処”とし、不快な出来事から逃避したり否定的に解釈する“回避・逃避的対処”との2因子構造を仮定している。各項目について、どの程度現在の自分自身の考え方や行動に近いかを、“まったくしない(0)”から“いつもする(3)”の4件法で評定を求めた。

結果と考察

1. 各尺度の信頼性と妥当性の検討

直接経験による泣きおよび代理的経験による泣き

調査1と同様に1から4の4段階で得点化した。直接経験による泣きの尺度24項目については、まず回答の分布に著しく偏りのあった3項目（8：自分が本当に行きたいと思っていた学校の入学試験に落ちた,13：とてもかわ

わいがっていたペットが死んでしまった,16：あこがれていたスポーツ選手や芸能人が亡くなった）を除外したうえで最尤法による因子分析（プロマックス回転）を行った。その結果、調査1と同様に“愛着危機”“達成・敗北”“確信のなさ”の3因子が抽出された（Table 1）。さらに確認的因子分析を行ったところ,3因子モデルは、“愛着危機”と“確信のなさ”を一つの因子にした2因子モデルおよび1因子モデルに比べ、適合度が高いことが明らかとなった（Table 2）。Table 1に示されるように、調査2の結果を調査1と比較すると、“愛着危機”に含まれていた“大切な人（家族や友人など）が亡くなった”や、“達成・敗北”に含まれていた“みんなで応援していたチームが負けてしまった”“転校・引越などにより、仲が良かった人と離れてしまった”“長い間、会っていなかった人と再会した”などの項目が除外されたが、概ね両調査で一致した因子構造が抽出できたとと言える。

代理的経験による泣きの尺度12項目についても、同様に最尤法による因子分析（プロマックス回転）を行った。その結果、調査1と同じく“身近な他者の肯定的感情”“身近な他者の否定的感情”“メディア・物語の他者の感情”の3因子が抽出された（Table 3）。確認的因子分析を行ったところ,3因子モデルの適合度が高いことが示され

Table 1 「自身に起った直接経験によって泣いた経験」の確認的因子分析結果

	F 1	F 2	F 3
因子1 「愛着危機」 8項目 (α=.720)			
5. 信じていた人に裏切られた	.527		
23. 他者を自分の言葉や態度で傷つけてしまった	.627		
11. 大切な人と深刻な口論や対立をした	.617		
2. 他者からひどく叱られたり、説教された #	.562		
21. 激しい身体的痛みに襲われた #	.353		
12. 他者から傷つけられたり、いじめられた	.527		
4. 他者からの思いがけない優しさに接した	.488		
3. 失恋した	.340		
因子1 「達成・敗北」 5項目 (α=.665)			
1. 自分が一生懸命練習してきて臨んだ試合で勝利したり、大会などでよい成績を残すことができた		.798	
7. 自分が努力してきて臨んだ試合で敗北したり、大会などで納得のいく結果がでなかった		.637	
10. 仲間たちとともに一つのことに取り組み、やり遂げた		.478	
14. みんなで応援していたチームが勝利した		.332	
6. 卒業式に友人と離れたり、今までの思い出がよみがえった		.397	
因子3 「確信のなさ」 4項目 (α=.684)			
18. 自分の将来のことを考え、どうしたらいいのか、と途方にくれてしまった			.659
17. 勉強や技術の習得などが自分の思うように進まなかった			.707
19. さびしくてしかたがないと強く感じた			.504
22. 非常に自分の体が疲れていた			.563
因子間相関			
	愛着危機		
	達成・敗北	.442 ***	
	確信のなさ	.624 ***	.157
残 余 項 目			
	調査1の結果との対比		
9. 大切な人（家族や友人など）が亡くなった	愛着危機		
24. みんなで応援していたチームが負けてしまった	達成・敗北		
15. 転校・引越などにより、仲が良かった人と離れてしまった	達成・敗北		
20. 長い間、会っていなかった人と再会した	達成・敗北		
削 除 項 目			
	調査1の結果との対比		
8. 自分が本当に行きたいと思っていた学校の入学試験に落ちた	残余項目		
13. とてもかわいがっていたペットが死んでしまった	愛着危機		
16. あこがれていたスポーツ選手や芸能人が亡くなった	残余項目		

註) #印の項目は、調査1では含まれていない。

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05, + p < .10

た (Table 2)。

以上の結果から、直接経験による泣きの尺度では、“愛着危機”と“確信のなさ”で、代理的経験による泣きの尺度では、“身近な他者の肯定的感情”と“身近な他者の否定的感情”との間で因子間相関が高いものの、各因子は独立した泣きの経験場面を反映しているとみなすことができる。

共感性およびストレス・コーピングの因子構造

橋本・角田⁸⁾による共感性尺度、尾関¹¹⁾のストレス・コーピング尺度の因子構造を確認するために、最尤法による因子分析(プロマックス回転)を行った。その結果、共感性尺度およびストレス・コーピング尺度ともに先行研究で見出されている因子構造が確認された^{8) 11) 12)}。すなわち、共感性尺度では、“想像的感情移入(8項目: $\alpha=.813$)” “視点取得(6項目: $\alpha=.720$)” “共感的関心(4項目: $\alpha=.620$)” “個人的苦痛(5項目: $\alpha=.676$)” の4因子が確認された (CMIN/DF=1.861, GFI=.842, AGFI=.805, CFI=.817, RMSEA=.065)。Davis⁹⁾や登張¹⁰⁾によると、“想像的感情移入”とは、小説や映画などの中の架空の他者に感情移入する傾向を示しており、“視点取得”は、現実の他者の立場に立って気持ちを想像する傾向を示す。これに対し、“共感的関心”とは、他者の不運な感情体験に対して、かわいそう、心配するなど他者に向かう情動反応が起こる傾向を示し、“個人的苦痛”とは、他者の苦痛に対して、苦痛や不安、動揺など、他者に向かわない自分中心の感情的反応が起こる傾向を示している。一方、ストレス・コーピング尺度では、“積極的対処(9項目: $\alpha=.720$)” および “回避・逃避的対処(5項目: $\alpha=.667$)” の2因子構造が確認された (CMIN/DF=2.489, GFI=.883, AGFI=.839, CFI=.755, RMSEA=.085)。

以上の結果から、いくつかの因子ではやや信頼性の低いものの概ね許容範囲であるとみなし、以下の分析では

項目ごとの素点合計を項目数で割った尺度得点を算出して、感情の高まりや泣きの体験の程度、あるいは、直接経験による泣き、代理的経験による泣きの経験と共感性およびストレス・コーピングとの関連性について、男女による違いが認められるのかについて検討した。

2. 感情体験の程度と泣きの体験における男女差

泣きの経験による男女差を検討するために、男女ごとに直接経験による泣きおよび代理的経験による泣きの因子ごとの評定平均値を算出した。その結果を Table 4 左に示す。男女ともに平均点は概ね2点台であり、感情がこみあげてきてはいるが、泣くまでに至らず泣くことをこらえている様子がうかがえる。この評定平均値に基づいてt検定を行ったところ、全ての因子で男女差が認められ、男性よりも女性で得点が高かった (愛着危機: $t(203)=-5.00, p<.001$; 達成・敗北: $t(203)=-4.91, p<.001$; 確信のなさ: $t(203)=-7.64, p<.001$; 身近な他者の肯定的感情: $t(203)=-2.75, p<.01$; 身近な他者の否定的感情: $t(203)=-3.48, p<.001$; メディア・物語の他者の感情: $t(203)=-6.42, p<.001$)。すなわち、男性に比べ女性の方が、自他に起こった出来事を経験して、泣きに至る感情の高まりをより強く経験していることが読み取れる。

さらに、自己や他者に起こった出来事を契機として、

Table 2 「自身に起こった直接経験によって泣いた経験」および「他者に起こった出来事による代理的経験によって泣いた経験」におけるモデルの各種適合度指標値

	CMIN/DF	GFI	AGFI	CFI	RMSEA
直接経験による泣き					
3因子モデル	1.619	.904	.873	.887	.055
2因子モデル	2.048	.883	.846	.822	.072
1因子モデル	2.889	.832	.480	.677	.096
代理的経験による泣き					
3因子モデル	2.461	.908	.859	.923	.084
2因子モデル	3.409	.863	.799	.868	.108
1因子モデル	5.488	.789	.695	.749	.148

Table 3 「他者に起こった出来事による代理的経験によって泣いた経験」の確認的因子分析結果

	F 1	F 2	F 3
因子1 「身近な他者の肯定的感情」 4項目 ($\alpha=.819$)			
7. 知人がとても喜んでいる姿を目のあたりにしたり、本人からその話を聞いたりした	.826		
8. 大切な人(家族や友人など)がとても喜んでいる様子を目のあたりにしたり、本人からその話を聞いたりした	.800		
2. 知人からとてもいいことがあったという知らせが届いたり、人づてにそのことを聞いたりした	.593		
11. 大切な人(家族や友人など)からとてもいいことがあったという知らせが届いたり、人づてにそのことを聞いたりした	.710		
因子2 「身近な他者の否定的感情」 4項目 ($\alpha=.826$)			
12. 大切な人(家族や友人など)がとても悲しい思いをしているという知らせが届いたり、人づてにそのことを聞いたりした		.729	
4. 知人がとても悲しい思いをしているという知らせが届いたり、人づてにそのことを聞いたりした		.718	
1. 大切な人(家族や友人など)の悲しんでいる様子を目のあたりにしたり、本人から話を聞いたりした		.683	
6. 知人がとても悲しんでいる様子を目のあたりにしたり、本人からその話を聞いたりした		.821	
因子3 「メディア・物語の他者の感情」 4項目 ($\alpha=.729$)			
10. ドキュメンタリー番組やニュース番組で他者がとてもつらそうにしている姿を見た			.768
3. 映画や本などで物語の登場人物がひどい目にあっている様子を見た			.604
9. 映画や本などで物語の登場人物がとてもすばらしいことをやり遂げた姿を見た			.599
5. ドキュメンタリー番組やニュース番組で他者がものごとをやり遂げ、とても喜んでいる姿を見た			.595
	因子間相関		
身近な他者の肯定的感情			
身近な他者の否定的感情	.785 ***		
メディア・物語の他者の感情	.376 ***	.488 ***	

註) *** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.10$

Table 4 男性・女性ごとの「感情体験」と「泣きの体験」の程度

	評定平均値		感情体験 a)				泣きの体験 a)			
	男性 (n=63)	女性 (n=142)	男性 (n=63)	女性 (n=142)	男性 (n=63)	女性 (n=142)	男性 (n=63)	女性 (n=142)	男性 (n=63)	女性 (n=142)
自身に起った直接経験によって泣いた経験										
愛着危機	2.04 (.492)	2.48 (.621)	***	5.29 (2.09)	6.03 (1.79)	**	.73 (.95)	1.96 (1.83)	***	
達成・敗北	2.05 (.509)	2.47 (.671)	***	3.67 (1.39)	3.90 (1.21)		.43 (.64)	1.35 (1.30)	***	
確信のなさ	1.89 (.476)	2.50 (.637)	***	2.84 (1.18)	3.48 (.89)	***	.11 (.41)	.88 (1.01)	***	
他者に起った出来事の代理的経験によって泣いた経験										
身近な他者の肯定的感情	1.89 (.521)	2.10 (.501)	**	3.06 (1.47)	3.53 (1.04)	*	.06 (.30)	.17 (.52)	+	
身近な他者の否定的感情	2.01 (.621)	2.37 (.718)	***	2.97 (1.45)	3.36 (1.12)	+	.13 (.38)	.60 (.99)	***	
メディア・物語の他者の感情	2.26 (.605)	2.88 (.700)	***	3.51 (.91)	3.71 (.71)		.40 (.94)	1.49 (1.33)	***	

註) a) 表中の数値は平均項目数 (括弧内は標準偏差) を示す

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05, + p < .10

感情の表出として泣きの体験の頻度、あるいは泣くまでには至らないものの感情の高まりを体験している頻度について、男女による違いが認められるのかについてより詳細に検討した⁵⁾。そこで、直接経験による泣き、代理的経験による泣きの因子ごとに、“感情がこみあげてきたが、大抵泣くほどではなかった”“感情がこみあげてきたが、大抵泣くことをこらえた”“感情がこみあげてきて泣くことが多かった”のいずれかに評定された項目数を感情体験の程度を示す指標として、また、“感情がこみあげてきて泣くことが多かった”に対する評定項目数を泣きの体験の程度を示す指標として算出した (Table 4 中・右参照)。

その結果、感情体験の程度では、“愛着危機 (t (203) = -2.45, p < .05)”“確信のなさ (t (203) = -3.83, p < .001)”“身近な他者の肯定的感情 (t (203) = -2.27, p < .05)”で有意差が認められ、女性の方が男性よりも感情の高まりを体験する程度が高かった。一方、泣きの体験の程度では、“身近な他者の肯定的感情”を除く5つの因子で有意差が認められ (愛着危機: t (203) = -6.33, p < .001; 達成・敗北: t (203) = -6.81, p < .001; 確信のなさ: t (203) = -7.79, p < .001; 身近な他者の否定的感情: t (203) = -4.92, p < .001; メディア・物語の他者の感情: t (203) = -6.70, p < .001), 女性の方が男性よりも泣きの体験の程度が高いことが示された。

このことは、Vingerhoets, et al⁴⁾や Bekker & Vingerhoets⁵⁾と同様、男女によりどのような状況で感情の高まりを体験しやすいのか、また、どのような状況でその感情の体験を泣きに表出しやすいのかに関して性差が存在することを示している。すなわち、自己に起こった“達成・敗北”といった経験や、身近な他者に起こった否定的感情

に接する経験、あるいはニュースや映画、物語による感情体験では、男性も女性と同様に感情の高まりを感じているが、実際に涙した経験の頻度では男性よりも女性の方が多く、男性では泣くことを抑制している傾向が明らかになった。これに対し、自身にとって不安や孤独感を感じる“愛着危機”や“確信のなさ”の状況では、泣きの体験の頻度のみならず、男性に比べ女性の方が感情の高まりを体験した頻度が高いことが示された。一方、“身近な他者の肯定的感情”では、女性の方が男性よりも感情の高まりを体験していたが、男女ともに泣いた体験自体が極めて低く、明確な男女差が示されなかった。

3. 泣くことと共感性、ストレス・コーピングとの関係

共感性とストレス・コーピングの男女ごとの平均値を Table 5 に示す。共感性では“視点取得”を除く3因子で男女差が認められ、女性の方が男性よりも得点が有意に高かった (想像的感情移入: t (203) = -3.29, p < .001; 共感的関心: t (203) = -2.42, p < .05; 個人的苦痛: t (203) = -1.97, p < .05)。一方、ストレス・コーピングでは両因子ともに男女で違いは認められなかった。

最後に、男女によって泣くことと共感性およびストレス・コーピングとの関連のしかたに違いが認められるかを検討するために、直接経験による泣き、代理的経験による泣き尺度と共感性尺度、ストレス・コーピング尺度の各因子の尺度得点間の相関係数を算出した。但し、調査対象者の年齢の違いが泣いた経験やストレス・コーピングなどに影響する可能性があるため、年齢を制御した偏相関係数を算出した。結果を Table 6 に示す。

泣きと共感性との関連では、男女ともに認知的側面である“視点取得”で関連が多く見られた。特に女性では“メディア・物語の他者の感情”を除く直接経験による泣き、代理的経験による泣きの各因子で“視点取得”との正の相関が有意であった。一方、男性では“達成・敗北”“身近な他者の否定的感情”“メディア・物語の他者の感情”との間でのみ“視点取得”との正の相関が有意であった。このように、他者の立場に立って感情を推測する“視点取得”の高い人は、男女にかかわらず自己の達成・敗北の場面や身近な他者の否定的な出来事で感情

Table 5 共感性およびストレス・コーピングの男女別平均点

	男性 (n=63)	女性 (n=142)	
共感性			
想像的感情移入	4.56 (.934)	5.06 (1.049)	***
視点取得	4.44 (.915)	4.43 (.885)	
共感的関心	5.02 (1.035)	5.38 (.977)	*
個人的苦痛	4.40 (1.030)	4.69 (.944)	*
ストレス・コーピング			
積極的対処	1.63 (.560)	1.67 (.503)	
回避的・逃避的対処	1.41 (.606)	1.55 (.619)	

註) 括弧内は標準偏差, 右端は t 検定結果を示す

*** p < .001, * p < .05

Table 6 男性・女性ごとの泣くことと共感性、ストレス・コーピング尺度間の偏相関係数（年齢を制御変数として）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1:愛着危機		.328 **	.300 *	.282 *	.531 ***	.232 +	-.021	.111	.223 +	.241 +	.275 *	-.085
2:達成・敗北	.263 **		.014	.418 ***	.450 ***	.284 *	-.146	.344 **	.054	-.087	.340 **	-.028
3:確信のなさ	.370 ***	.063		.199	.326 **	.143	-.085	.020	.007	.109	.078	-.201
4:身近な他者の肯定的感情	.303 ***	.281 ***	.221 **		.727 ***	.498 ***	-.098	.214 +	-.025	-.157	.176	.299 *
5:身近な他者の否定的感情	.457 ***	.244 **	.288 ***	.597 ***		.479 ***	.004	.300 *	.077	.030	.243 +	.114
6:メディア・物語の他者の感情	.131	.148 +	.201 *	.149 +	.271 ***		.074	.275 *	.256 *	.220 +	.307 *	.182
7:想像的感情移入	.031	-.052	.180 *	-.021	.118	.275 ***		.074	.258 *	.056	.248 +	-.027
8:視点取得	.333 ***	.233 **	.217 *	.254 **	.328 ***	.086	.080		.229 +	.094	.449 ***	-.052
9:共感的関心	.096	.197 *	.091	.072	.167 +	.135	.075	.282 ***		.215 +	.208	-.342 **
10:個人的苦痛	.290 ***	.161 +	.276 ***	.135	.208 *	.095	.123	.296 ***	.224 **		.111	-.125
11:積極的対処	.279 ***	.256 **	.140	.286 ***	.177 *	.108	-.002	.449 ***	.138	.092		-.013
12:回避・逃避的対処	-.084	-.022	-.088	-.012	-.005	-.018	-.013	-.102	-.119	-.241 **	.186 *	

註) 対角線より上段は男性 (n=60), 下段は女性 (n=136)。*** p<.001, ** p<.01, * p<.05, + p<.10

が高まり涙する傾向にあることが読み取れる。加えて女性では、“愛着危機”“確信のなさ”“身近な他者の肯定的感情”でも“視点取得”との間に有意な正の相関が認められた。

これに対し、共感性の情緒的側面である“個人的苦痛”では、男性では泣きの経験との間に有意な相関は認められなかったのに対し、女性では泣きの経験の“愛着危機”“確信のなさ”“身近な他者の否定的感情”との間に有意な正の相関が認められた。他者の苦痛に対して、自分自身に苦痛や不安などの感情反応が起こり囚われてしまう傾向の高い女性ほど、自分自身や身近な他者に起こる喪失感や不安な状況で涙する傾向が高いことが読み取れる。

Van Tilburg, et al⁶⁾は、共感的傾向が高いほど泣く傾向 (crying proneness) が高いことを明らかにしているが、本結果からはさらに以下の点を指摘することができるであろう。すなわち、男女で“視点取得”の得点には違いが認められなかったことを考え合わせると、男性よりも女性の方が共感性の認知的側面と泣きの関連性が強いことがうかがえる。加えて、Table 6からは男性では“視点取得”は共感性の情緒的側面と有意な関連を示さないのに対し、女性では“個人的苦痛”や“共感的関心”と有意な関連が示されている。このことから、女性では他者の感情を推測することで、自分自身が感情に巻き込まれてしまい、結果として感情体験や泣きの体験が多くなったと考えられる^{4) 5) 6)}。

最後に、泣きの経験とストレス・コーピングとの関連では、男性、女性ともに“回避・逃避的対処”傾向との関連ではほとんど有意な関連を示さなかった。一方、“積極的対処”傾向との関連では、男女ともに“愛着危機”“達成・敗北”との間に有意な相関が認められた。このことから、泣いた体験の頻度や共感性との関連では男女による違いが示されたが、自己に起こった出来事で泣いた経験は、男女ともに積極的なストレス・コーピングと関連していることが読み取れる。これに対し、代理的経験による泣きでは男女による違いが認められ、男性では“メディア・物語の他者の感情”との間に、女性では“身近な他者の肯定的感情”“身近な他者の否定的感情”との

間に“積極的対処”傾向との相関が有意であった。女性では自分自身と関わりのある他者との関係性に基づく出来事での泣きの経験は積極的なストレス・コーピングと結びついているが、メディアや虚構の世界での出来事は結びついていないことがわかる。一方、男性では映画やテレビ、物語での出来事を通じた泣きの経験は積極的なストレス・コーピングと結びついていた。

このことは、“メディア・物語の他者の感情”を中心に見ると男女の違いがより明確に示される。すなわち、男性では“メディア・物語の他者の感情”と共感性の“視点取得”“共感的関心”およびストレス・コーピングの“積極的対処”傾向との相関が有意であったのに対し、女性では共感性の“想像的感情移入”とのみ相関が有意であった。男性に比べ女性ではニュースや映画、物語による感情体験で泣く頻度は高かったが、メディアや物語の世界を自己から距離を置いた世界としてとらえていることが読み取れる。一方、男性ではより自己に引きつけてとらえており、そのことがストレスに対する積極的な対処行動と結びついていることがうかがえる。

以上のように本研究では、男女の泣きの経験に関する状況要因を測定する尺度を作成し、泣きの状況場面における泣いた経験の頻度や、共感性やストレス・コーピング要因との関連について、男女による違いに焦点をあてて検討してきた。その結果、青年期における男女の“泣き”は積極的なストレス・コーピングと結びついていることが明らかとなった。また、共感性やストレス・コーピングとの関連に示されるように、“泣き”を引き起こすメカニズムや“泣くこと”の意味について、男女による違いが示された。今後は、本研究で作成された尺度の精緻化を試みるとともに、泣いた結果自他に起こる心理的変化との関連について検討していくことを通じて、大人が泣くことの意味についてさらに検討していきたい。

引用文献

- 1) 澤田忠幸 (2003) : 本学看護学科学生の悩みと精神的健康に関する調査, 愛媛県立医療技術短期大学紀要, 16, 23-31.
- 2) Saarni, C. (2000) : Emotional competence: A developmental perspective. In: The Handbook of Emotional Intelligence, Bar-On, R., & Parker, J.D.A. (eds), Chap.4, pp. 68-91, JOSSEY-BASS: San Francisco.
- 3) 橋本巖, 澤田忠幸, 松尾浩一郎他 (2006) : 青年における泣きの対人的表出制御と関連要因の検討 — 「ひとりになって泣くこと」と「人前でなくこと」 —, 愛媛大学教育学部紀要, 53 (2), 45-55.
- 4) Vingerhoets, A.J.J.M., Boelhouwer, A.J.W., Van Tilburg, M.A.L., et al (2001) : The situational and emotional context of adult crying. In: Adult Crying: A biopsychosocial approach, Vingerhoets, A.J.J.M. & Cornelius, R.R. (eds), Chap.5, pp.71-90, Hove, UK: Brunner-Routledge.
- 5) Bekker, M.H.J., & Vingerhoets, A.J.J.M. (2001) : Male and female tears: Swallowing versus shedding? The relationship between crying, biological sex and gender. In: Adult Crying: A biopsychosocial approach, Vingerhoets, A.J.J.M., & Cornelius, R.R. (eds), Chap.6, pp.91-114, Hove, UK: Brunner-Routledge.
- 6) Van Tilburg, M.A.L., Unterberg, M.L., & Vingerhoets, A.J.J.M. (2002) : Crying during adolescence: The role of gender, menarche, and empathy. *British Journal of Developmental Psychology*, 20, 77-87.
- 7) Williams, D.G., & Morris, G.H. (1996) : Crying, weeping or tearfulness in British and Israeli adults. *British Journal of Psychology*, 110, 217-226.
- 8) 橋本巖, 角田豊 (1992) : 感情の「わかりにくさ」に関する信念と青年の孤独感・共感性の関係 (II), 愛媛大学教育学部紀要, 教育科学, 39 (1), 63-74.
- 9) Davis, M.H. (1983) : Measuring individual differences in empathy: Evidence for multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- 10) 登張真稲 (2003) : 青年期の共感性の発達: 多次元視点による検討, 発達心理学研究, 14, 136-148.
- 11) 尾関友佳子 (1993) : 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂: トランスアクションな分析に向けて, 久留米大学大学院比較文化研究科年報, 1, 95-114.
- 12) Hashimoto, I., Sawada, T., & Matsuo, K. (2006) : Situational factors that moderate gender differences in regulation of adolescent emotional crying. 19th Biennial ISSBD meeting programme and abstracts, July 2-6, 2006, Melbourne Australia (published as a CD-ROM

at the conference).

- 13) 岡安孝弘, 嶋田洋徳, 丹羽洋子, 森俊夫, 矢富直美 (1992) : 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係, 心理学研究, 63, 310-318.

脚 註

脚1) 本プロジェクトでは、泣いた経験の有無 (crying frequency に該当する) と経験があった際の泣きへの反応の程度 (crying proneness に該当する) の両者⁴⁾を考慮した評定方法として本評定法を採用した。なお、得点化に際してはストレス研究¹¹⁾で用いられる評定法なども参考にした。

要 旨

本研究では、青年期の情動的な泣きを引き起こす状況要因とその男女差に関連する要因について検討した。調査1では総合大学の学生249名を対象に、自己の直接経験および他者に起こった出来事の代理的経験による泣きを記述した2種類の質問紙を実施した。調査対象者に対して、各項目について感情の高まりや泣いた経験の観点から評定を求めた。調査2では医療福祉系の学生を中心に206名を対象として、調査1で用いた泣きの経験に関する質問紙に加え、共感性およびストレス・コーピングに関する質問を行った。

その結果、調査1と調査2を通じて、直接のおよび代理的泣きの状況因子として各3因子構造が確認された。各因子の得点を男女で比較したところ、男女で感情の高まりを体験した程度は異ならないが、感情を抑えきれず泣いた体験では女性の方が多い状況と、泣いた体験のみならず感情の高まりそのものを体験した程度も女性の方が多い状況が存在することが示された。また、男女ともに泣きの経験はストレス・コーピングや共感性と関連していたが、特に女性では“視点取得”や“個人的苦痛”と関連していた。これらの点は、男女における泣くことの意味の視点から議論された。

Key words : 情動的泣き, 状況要因, 共感性, ストレス・コーピング, 男女差

附 記

本研究の調査は、平成17, 18年度科学研究費補助金 (17653073代表者: 橋本巖) の助成を受けて行われた研究プロジェクトの一部である。なお、本研究の一部は3名の連名により第19回国際行動発達学会 (ISSBD) および日本教育心理学会第48回総会で発表をおこなった。